

* 20cm 彗星搜索鏡の写真発見

アーカイブ室新聞 123号で、昭和26年に東京天文台職員組合が発行した「見学の栞」の中に彗星搜索鏡の図を見つけたという記事を書いた。この図に見るような望遠鏡の写真は筆者をはじめ、筆者の周りにも見たことのある者はいなかった。しかし、世の中は広いもので1928年頃の天文月報で写真を見たことがあるというものが現れた。天文月報のバックナンバーを繰って見ると、1927年12月号の雑報欄に東京天文台に新しく8吋望遠鏡が2台購入されたという記事があり、1928年1月号に彗星搜索鏡(写真1)に写真が載っていたのである。そしてインターネットで検索していたら東北大学図書館のリポジトリ(<http://hdl.handle.net/123456789/28042>)の中に東京天文台絵葉書第4集の中の写真としてこの彗星搜索鏡の写真があった(写真2)。

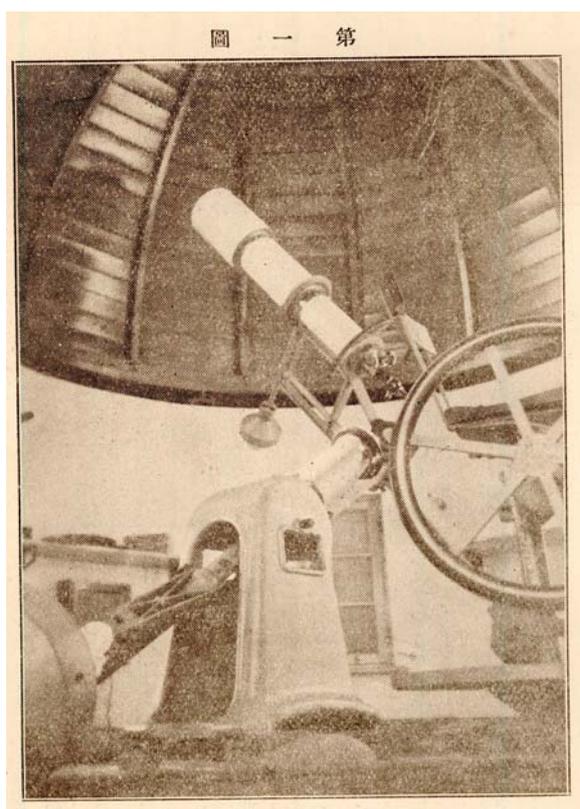


写真1 天文月報1928年1月号の写真

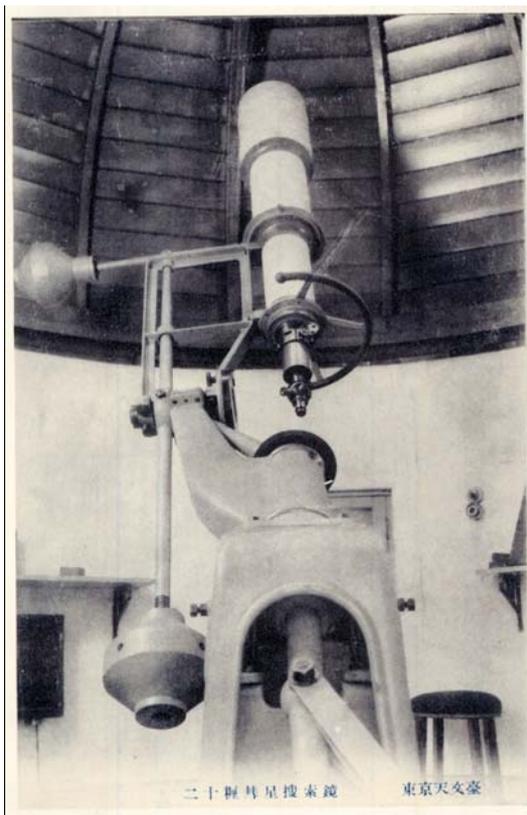


写真2 東北大学図書館のリポジトリ

これらの写真は、アーカイブ室新聞123号の図とは僅かに違っているが、それはフェイダーの有無であるが、この写真が彗星搜索鏡であることは疑いの余地はない。確かに東京天文台に彗星搜索鏡が存在していた。筆者は「コメットシーカー」という望遠鏡が現在のグランド西側にあったという記事を読んだ事があり、その建物を覚えているが、記憶に

ある comet シーカーの建物はスライディングルーフであったが、この写真では彗星搜索鏡はドームに収まっている。このドームはなんとなく見覚えがある。筆者が7~8年間（昭和48年~56年）観測した卯酉儀と呼ばれた30cm反射望遠鏡があったドームの中とそっくりなのである。ただ、筆者が観測していた頃はドームはモーターで回転できたが、このドームは手動回転である。この辺りのことは、まだご存命の古い人に聞いて見なければならぬと思っている。とにかく彗星搜索鏡の写真は発見された。

天文月報1928年1月号には、この望遠鏡の図が載せられ（図1）解説もある。

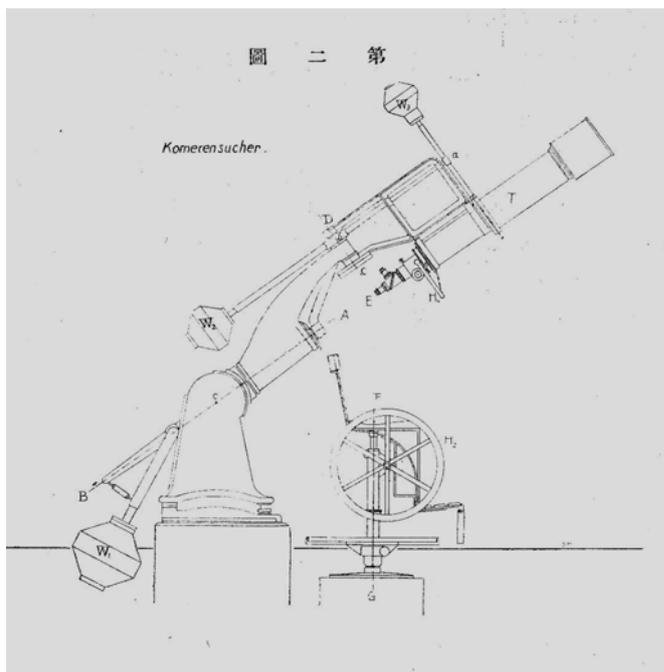


図1 彗星搜索鏡解説図



図2 見学の葉の図

解説によれば、T:望遠鏡、AB:極軸、CD:赤緯軸、W1、W2、W3:重り、E:接眼鏡、H1、H2:把手とある。彗星搜索鏡として必要な事が5点挙げられている。1. 視野が広いこと、2. 倍率の変更が容易で、相当高倍率が使用できること、3. 8、9等程度の量まで認め得ること、4. なめらかに軽く動かし得ること、5. 観測者の疲労を少なくすることである。

1. 3. の条件を満たすために、焦点距離を短く、比較的大きな対物レンズ（20cm）が使っている。焦点距離は133cmで普通の望遠鏡の1/3、倍率は27倍から266倍までの接眼鏡が用意されていた。大きな把手でなめらかに駆動できたとある。また彗星の搜索は数時間にわたる観測になるため、観測者の疲労を少なくするためこのような構造となり、極軸と赤緯軸の交点がEの付近にあるので、望遠鏡をどの方向に向けても接眼部の位置は変わることがなく、観測者はFGの軸を回転軸とする座席で殆ど姿勢を変えずに観測が出来、そして座ったままドームさえ回せたようだ。

この望遠鏡で、東京天文台に20cm望遠鏡が3台揃ったとある、1台は第1赤道儀室にあるツアイス製の20cm屈折望遠鏡であろう。この彗星搜索鏡はどんな運命をたどったのだろうか。1台は井上四郎が使った太陽の写真撮影に使われたものだろう。